
みんな学ぶ気です？

静岡運転所

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんな学ぶ氣です？

【Zコード】

Z6530C

【作者名】

静岡運転所

【あらすじ】

那智広裕は鉄分多めな普通の高校二年生。彼を取り巻くは快活な幼馴染を中心とした個性的なクラスメイトたち。さらにそこに転校生がやってきて広裕の日常は毎日が波乱万丈！さらには新豊学園全体を巻き込んで学園は大騒ぎ！

普通のようで普通じゃないちょっと鉄分の入った学園コメディ、ここに登場！

第一話 初めての、部活（一）

第一話 初めての、部活（一）

桜吹雪が舞っている。

月初めの天気予報では『今年は暖冬の影響で早めに散つてしまふでしょう』とか言っていたが、四月八日^{（ひちじつ）}の今日も俺の通う新豊学園の敷地沿いに植えられた桜の木はピンク色に染まつていった。昨日は入学式があつて新入生歓迎ムードに沸き立つていた学園も、入学式前の静かな日常に戻りつつある。もつとも静かといつてもそれはあくまで祭典^{（イベント）}と比べて静かという意味で、決して学園全体の活気が収まっているわけではない。敷地の半分近くを占める運動場からは野球部のむさ苦しい声が、体育館からはシューズのグリップが出すあの独特の音が聞こえてくる。私立の高校にありがちな自由な校風と縛るのも縛れていらない校則 - 良くも悪くもルールにとらわれない - のせいか祭典となると異常な盛り上がりを見せるのだ。

そんな祭典大好きな新豊学園にはもう一つの顔がある。卒業生の実に八十パーセントが大学へ進学、有名どころの大学にも何十人も出す県内随一の進学校なのだ。愛知県のちょうど真ん中、日進^{（ひじん）}と豊田^{（とよた）}の間という非常に中途半端な場所にありながら新豊学園には県内から千人近い学生が集まっている。

しかし現実問題、新豊学園のある明岡市^{（あきおか）}以外から通う生徒は少ない。というのも、明岡が中京圏の中核都市の名古屋のベッドタウンとして開かれ、新豊学園はそこに付随する学校として作られたという縁緒がある。この学校は元々名古屋東部に開かれた明岡の設備^{（ヨーテンインフラ）}の一つなのだ。現にかつてあつた新豊学園の初等部・中等部は、それぞれ明岡市立の小学校と中学校として公営化されて、今は高等部しか残っていない。そのため俺のように明岡に住んでいる生徒が殆ど。遠くても二つ隣の猿投^{（さなげ）}や八草^{（やくさ）}くらいまで、それより遠い生徒は新豊

学園の近くにあるという寮（俺は見たことがないが……）に住んでいるらしい。名田上は私立の学校だが、どうみてもシステムは公立の学校と一緒にだ。

ただ一つ県立の高校と違うことがあるとすれば、それは金。なんでも田んぼや畠が広がっていた地区を買い上げて住宅地にしたため、そこの土地を持っていた地主やニュータウンプロジェクトに携わっていた役人などが『それが将来のためならば』と大金をつき込んだそう。万単位、億単位、はたまた数十億単位……その金額は通つている俺たちを含めて誰も知らない。一説には「学校の地下にある巨大金庫には一億円以上のお金が眠っている」と言われているが、未だ都市伝説の域を出ていないのが現実だ。

その新豊学園の敷地の西端に、アパートのよつな二階建ての建物がある。通称『部室棟』。部員の数が十人にもいかないような弱小文化部がいくつも身を寄せ合っている。創立当初は「質実剛健」をモットーとする男子校だった

新豊学園が共学になつたのはそう新しい話ではない。高度経済成長期の末期。ニュータウンへの入居希望者の第一群が明岡市に新天地を求めやつてきた頃だ。だが男子校特有の熱血の気概はまだ失われていない。新豊学園では今でも運動部のほうが優勢で、大体の文化部はアパートサイズの部室と（運動部と比べると）少ない部費とで細々と活動している。

俺の所属する部活の部室は、その一階の突き当たりにあつた。

こここの部室は見た目のみならず中身までアパートそのものだ。1Kの部屋から風呂・トイレ・キッチンを取り除いたような、一続きの部屋になっている。脇には本の詰まつた金属製の本棚が、そして真ん中には会議で使うような折り畳み式の机が組み合わさった大きな一枚のテーブルが鎮座している。

テーブルの上に据え置き状態のノートパソコンを叩くのをやめて、俺は顔を上げた。

「今日から仮入部か」

「え、 そうなの？」

目の前にいる少女が意外そうな顔をする。北浜結那きたはま ゆうなという名のつくこの少女は俺の幼馴染であり、数少ない部員の一人である。茶色がかつたショートヘアが窓から吹き込む春風に揺れている。女子高生としては平均的な背丈。整った顔立ちは明るい性格を反映しているように見える。俺が言うのもなんだが、なかなかの美少女だつたりする。

「どんなくらい入るかなあ」

結那と机を隔てて反対側に座る上市かみいち フルネームは上市董すみれ が

腕を組んだ上に顎を載せてウキウキ顔で笑っている。これからうちの部活が存続できるかできないかの正念場だというのに。まったく、呑気な奴だ。顔を揺らす度に、上市の最大の特徴である、肩の高さまで伸びるポーネテールがひょこひょこと生き物のように跳ねる。

現在部室にいるのは三人。うちの部活のメンバーは今のところこの三人だけだ。

「誰か来ないかなあ」

「来るといいんだけどねえ……」

「……、ああ、すごくわかる」

「ちょっと広裕？ 何で今私を見たの！？」

「いや、別に意味はないけど」

結那から目をそらす形で、視線は部室の入り口に向かう。これもアパートにありがちな鉄の扉だ。薄汚れた鉄の門番は新たな客人を迎える入れる様子もない。

「ま、去年の感じなら一人一人は入るだろ」

かの扉の向こうでは白いプレートが春風に吹かれていることだらう。プレート

俺たちの部活の名を記した、大切な看板が。

即ち、『鉄道研究部』と。

「鉄道研究部ってどんな部活？」と聞かれるのは日常茶飯事なので、俺は俺なりの回答を用意している。簡単に言つてしまえば鉄道を研

究する部活だ。え？何の答えにもなってないって？そんなことを言
われても他に答えようがない。鉄道研究部 略して鉄研部の活動
目的は『鉄道を極める』ことに尽きる。鉄道を知り、鉄道を見て、
鉄道に乗り、鉄道を撮る。鉄道を骨の髄まで味わうのが俺たち鉄研
部の骨子だ。

そんな部活だから、畢竟ここは鉄道好きが集つ場所となる。逆に鉄
道に興味のない一般人が大勢を占めていたら驚きだ。この『好き』
というのはただ鉄道に乗るのが好きとか、そういう次元じゃない。
鉄道を五感で感じることができて初めて鉄道好きと語れる。これは
もはや理屈じゃない。だって好きなものは好きなんだから。俺はも
ちろんのこと、結那や上市も鉄道好きに含まれる。手前味噌ながら、
鉄道好きの美少女なんてそうそういうもんじゃない。そもそも女性
の鉄道好きというだけで数が絞られる。大半は中年や還暦を越えた
いわゆる団塊世代だ。今でこそデジタルカメラという便利なもののが
あるけれど、フィルム式カメラが全盛だった時はそもそもいかない。
カメラを一式揃えるのにも一定の収入が必要だつた。カメラを持つ
ていたのはカメラマンや一部のアマチュアだけ。高校生どころか若
手の社会人でさえ簡単に手を出せる代物ではなかつたのだ。それに
加えて、まだJRが国鉄だつた頃は、鉄道の写真を撮ること自体が
嫌われていた。駅のホームでカメラを構えていると駅員に捕まつて
カメラの中身をチェックされるのもしばしばあつたらしい。こんな
ことを知っているのも鉄道写真家だつた結那のお父さんから聞かさ
れたからなんだが これは今するような話じゃないな。

ただ、鉄道好きが大勢を占めているというのは、裏を返せば鉄道好
きでない一般人は寄り付こうとしてくれないという意味もある。
別にうちの部活は鉄道好きでなくとも大歓迎なのに。一般人には『
鉄分』アレルギーでも持つていてるんだろうか。悲しいことに新豊学
園では、部員は最低五人以上必要と決められている。なんとしても
部員をあと一人は 鉄道好きであるかどうかにかかわらず 集
めなければいけないので。とてもじゃないが選り好みしている場合

じゃない。

この危機的状況下で部長をやっているのがこの俺、那智広裕なぢひろやすだつたりする。つい先日までは先輩が一人いてそれぞれ部長と副部長についていたんだが、年度が替わる春休みを持って引退。空いてしまった役職を俺たち新一年生に割り振つたところ俺が部長になつてしまつた。なんで俺が、とは思ったものの結那と上市を見てすぐ思い直した。この面子の中で部長の職務を全う出来そうなのは、蠶負目せきばくめいに見ても俺しかいない。

「とりあえずこいつを片付けないとな」

俺は再びノートパソコンを開いた。やりかけの仕事が残つているからだ。

鉄研部の活動は基本的にこの部室だ。そりや本物の鉄道に乗るのは楽しいけど、毎日学校帰りにやれる活動じやない。毎日部室に集まつて個人個人で鉄道について調べるのが鉄研部の通常の活動になつていて。幸いにして部室には紙媒体からDVDまで数々の資料が揃つている。そのほとんどが先輩達の持ち寄つた品々だ。軽く漁れば『東北新幹線開業』とか『こんにちはJR』とか『さよなら』『まつかぜ』とか簡単に見つかるはずだ。本棚から今にも零れ落ちそุดがいくらあるのかのは現部長の俺でもわからない。量的にも金額的にも、俺たちにとっての宝の山なのだ。もちろん最近はインター何とかという便利なツールも登場したが、これだけ資料が揃つているとわざわざネットを開くのが億劫になつてくるぐらいだ。それに情報の正確さはネットの比ではない。

というわけで鉄研部の活動はいつもは慎ましやかなものになつている。しかし、鉄道好きである以上鉄道に乗りたくなるのは必然。そのため鉄研部では月に一度『研修旅行』を行つていて。運動部で言うところの合宿に当たる大事な活動だ。仰々しい名前だけどその実態はなんのことはない。ただ鉄道に乗りに行く旅行だ。近場なら日帰り、遠くなら数泊の長旅になる。中身は地域の壁を抜けて全国各地の鉄道を訪ねるというシンプルなもの。目的は一応『鉄道に対す

る見聞を深めるため』となつてはいるが、鉄道好きとしては乗つてしまえば楽しいわけで、この目的は完全に達成になつていて、費用は部費という形で学校が受け持つてくれるから何も問題はない。

ただ、あくまでも『研修』旅行。薔薇の花には棘とげがあるように、それがなりの優遇措置には裏がある。研修旅行が終わつた後に『研修レポート』という形で顧問を通じて学校に提出しなければいけないのだ。研修旅行がただの旅行にならないようにするためには、学校側の旅費の負担と等価の関係になつていて、聞けばレポートの出来が粗末だつたために自分で負担する羽目になつた年もあつたとか。部長の仕事の中にはこのレポートも含まれている。部長としての初仕事だけに気は抜けない。春休みがあけてから今日まで、こうしてパソコンとにらめっこをする日々が続いている。部員の件も重なつて頭が痛い。

運動部が準備運動を終えたのか、グランドが俄かに騒がしくなる。俺は再びレポートの続きを書こうとした。

ドンッ、ドンドンッ。

鈍い音が部室に響き渡る。誰かがドアを叩いているようだ。

「すみませーん」

耳に優しいソプラノに、雑誌に顔を寄せていた一人も急に顔を上げた。

「誰か来たのか……？」

「もしかして、入部希望者！？」

椅子を引き倒さん勢いで結那が立ち上がる。考えてみれば部室棟の二階の端にある鉄研部に用がある人間なんて限られている。こ、これは期待してもいいのか……？

「はーい……あ」

元気に満ちた結那がドアを開け放つと、俺たちの前に訪問者の姿が露わになる。西日に浮かび上るのは一人の少女のシルエット。逆光で黒一色モノクロだった影はゆっくりと、本来の色を取り戻していく。夜闇が広がつたような長い黒髪。制服から覗く透き通つた肌。切れ

長の眉に、すつと通つた鼻筋。部室の入り口と俺の座る席は離れているにもかかわらず整つた顔立ちが目を惹く。いわゆる正統派の大和撫子といった感じの出で立ちだ。それでいて、出るところは出てひっこむところはひっこむ、いわゆるモデル体形。グレーを基調とした新豊学園の制服も野暮つたくなく着こなしている。道理で纏っている空気が新豊学園の他の女子と違つわけだ。俺たちと同じ高校生とは思えないくらいの美人だった。

……して、こんな超絶美人はうちに何の用なんだろう？

「えーっと……」

超絶美人（仮称）の登場に結那も驚きを隠せていない。次の言葉を必至に探す結那に、彼女は穏やかな微笑を浮かべて。

「あ、入部届けを出しに来たんですけど」

についつと、そう、のたまつた。

うちの部室にはなぜか給湯設備がある。設備といつても簡素なシンクといいまどき珍しい電熱線ヒーターだけだが、そもそも元々十畳ぐらいしかない部室に給湯設備をつけたこと自体が謎だ。ただでさえ大量の資料の詰まつた本棚が部室を占領していているから実質八畳。間取りをアパートに真似たのは置くとしても、なにも給湯設備はないような……

とはいって、客人にお茶を出すことができるのもこの給湯設備がつてこそ。

「はい、どうぞ」

結那が慣れた手つきで超絶美人（仮称）の前に湯のみを置く。部屋の中央に縦に置かれた机を挟んで、俺の丁度真向かいに腰を落ちつけた超絶美人（仮称）は結那に一礼すると湯飲みを口元に持つていく。なんというか、一つ一つの所作がとても上品だ。大酒飲みのように湯飲みを叩きつける上市とは比べるまでもない。

と、彼女が湯飲みを覗き込む。どうしたんだろう。

「……これ、お茶柱立つてないわよ」

「おい結那、お客さんに茶柱の立つてないお茶出すとか失礼だろ」「初めて聞いたよそんなの！」

なんてユーモアのある人なんだろう。それにひきかえうちの結那ときたら……

「広裕、はい。董も」

「あ、ありがとう」

結那がお盆に湯飲みを二つ載せて戻ってきた。客人のついでに俺たちの分も淹れたようだ。

「はい、広裕の分」

「あいよ……ん？」

「どうしたの、広裕」

「結那……俺の湯飲み、どうみても出がらしあつてないんだが」「なんか文句でも？」

結那が目を細めて睨んでくる。意地でもこの出がらしをお茶と言い張るつもりらしい。

「いや……別に……」

これ以上言つたら物理的ダメージを受けそうなので視線を結那から回避。この程度で蹴られてたまるかつての。

再び俺の目の前に座る彼女に視線を戻す。

「えーっと、滑河さんでよかつた？」

俺の手元には今し方彼女からもらつた入部届けがある。滑河時子 なめがわ ときこ というのが今俺の向かいに座つている彼女の名前らしい。何気なく見ていたら学年の欄に目が留まる。俺たちと同じ一年生のところに丸印がつけてあつた。あれ、ひょっとして転部希望？でもそれなら入部届じやないよな。新豊学園は一年と一年はどこかの部活に入らなきゃいけないから、この時期の一年生は名簿上でもどつかの部活に所属していないとおかしいんだけど……

「あれ、滑河さんって去年部活はどうしてた？」

「あ、私は」

「広裕、滑河さんはここに来たばかりだつてば

急須とお盆（もちろん部室備え付けのものだ）を置いてきた結那が戻つてくるや否や会話に割り込んできた。なんだよ邪魔するな……？『来たばつか』？それって……

「もしかして滑河さん転校生？」

尋ねてみると滑河さんは穏やかに頷いた。隣のクラスに転校生が入ったつて誰かが言つてた気がする。転校生は教員と違つて全校生を前に紹介をするわけじゃない。自分のクラスならともかく、違うクラスだと完全に判らない。ああ、そつか。昨日のH.R.^{ホームルーム}の時に隣のクラスが盛り上がりつてたのはそれだったのか。いきなり壁越しに男子の雄叫びが聞こえてきたから何かと思ったけど、滑河さんが来て興奮してたとするなら納得がいく。

「……つて、結那は知つてたのかよ」

「名前だけはね」

そつけない答えが返ってきた。まださつきの茶柱の件を気にしているのか。

「……上市は？」

「滑河さんつて娘が隣のクラスに来たつてことぐらいしか二人の話を聞く限りお隣のクラスを除けば『謎の転校生現る！』ぐらいいの情報しか出回つてないみたいだな。

「でもすごいよねー」

結那がどこか夢見がちな表情を浮かべる。

「あの特進クラスに編入でしょ？」

「えっ？」

驚いた表情のまま、俺は滑河さんに目を移す。

「まあ、そうだけど」

「……そういうや隣は特進クラスだつたな」

滑河さんはさも当然のように言つていたが、実際問題特進クラスに入るのはかなり難しい。新豊学園は一学年がおおよそ四百人近い大所帯だ。それを受けたクラスも一学年あたり九つあるが、特進クラスはわずか一クラス。人数も三十五人と限られている。入試の段階

で既に別枠になつている上に授業自体も通常のよりハイレベル。選りすぐりの秀才たちが集う、新豊学園のトップといつてもいい。そんなところに途中から編入というのだから驚くほかない。当然編入するに当たつてなんらかのテストがあつたはずだが、突破しているから今こゝして田の前にいるわけで。なんだか田の前にいる滑河さんが恐ろしく見えてきた……

なんだか回り道をしてしまつたが、再び入部届に眼を戻そう。……他には特に問題はないな。

「ま、入部届は顧問に出すことになつてるけどね」

あはは、と軽く笑つて入部届を裏返す。すると滑河さんの顔に影が差して、

「そ、うだつたの?」「めんなさい。こっちが知らなかつたばかりに……」

申し訳なさそうに頭を垂れてくる滑河さん。本当に礼儀正しい人だ。物腰からなにから、あまりにも丁寧でこちらが恥ずかしくなつてくれる。

「あ、滑河さんは気にしなくとも大丈夫です。僕が出しありますんで」

ついには滑河さんが立つて謝る事態になつたので、丁重に断つてなんとか滑河さんを座らせた。

「広裕、なんで敬語?」

「え……いや、別に」

意識しているわけではない。なぜか滑河さんの前だと自然に敬語になつてしまつ。もしかしたら滑河さんには敬語にさせる何かが体から出でているんじゃなかろうか。

「じゃあ滑河さんは今日から鉄研部の……あ、そうだ。滑河さんは鉄道好き?」

「もちろん」

当然とばかりに胸を張る滑河さん。鉄道好きの一文字で反応したり、本物に違いない。

「ちなみにお気に入りの車両は？」

「やっぱスカ色の113かな。地元っていうのもあるかもしねないけど」

「113って、もしかして滑河さん、千葉から来た?」

「そう。千葉の八街^{やちまた}つてとこ」

頭の中では千葉県の地図が広がる。八街つていつとおおよそ佐倉と成東の間か。大体見当がついた。時刻表を見続けてきたおかげか、駅がある都市なら大体の場所が掴める。俺はなんとも思っていないがどうやら普通の人にはない能力らしい。県内外から多くの学生の集う新豊学園に入つても、その傾向は薄まる様子もない。初対面の人が驚く率は実に九割八分を超えている。世間的には奇異の目で見られている。もつとも、授業で日本の地名が出でぐることは滅多にないので使う機会も少ないわけだが。

「ああ、あそこね」

「……そんな台詞をさらつと言える広裕が恐いわ……」

「えつ、何が?」

「……」

結那が冷めた目線で俺を見据える。八街は特急も止まるから結那だつて知つてもおかしくはないはずなのに。

「ほ、他には?」

「あとは183とか『なのはな』とか……」

滑河さんから名前が挙がったのはいずれも千葉にある幕張車両センター所属の車両たちだ。いや、正確には所属だったと言つべきか。183系も165系『なのはな』も国鉄 日本国有鉄道。JRの前身にあたる からJRに受け継がれた車両のひとつだが、現在は183系が一本いるのみで残りは廃車になっている。千葉は国鉄の影響を色濃く残している地域だと聞いたことがあるが、その影響は確実に滑河さんにも及んでいるみたいだ。

「それじゃあ滑河さんも今日から鉄研部の一員ということです」

結那が立ち上がって滑河さんに手を差し伸べた。

「これからもよろしくね！」

差し伸べられた手に驚いたのか一瞬たじろいだ滑河さんだが、やがて

רְמִזְבֵּחַ וְאֶלְעָגָלָה

柔和な表情を浮かべて結那の手を取つたのだつた。

思えば。

思えばこれが、全ての始まりだったのだろう。
転校生の入部という思わぬ幸運に喜ぶ俺たちは、まだそのことに気づかない。

開かれたままのノートパソコンのキーボードに、春風が運んできた
桜の花びらがひらりと落ちる

第一話 初めての、部活（一）（後書き）

この作品では拙作『みんな乗る気ですー』（以下「本編」とします）を補完する作品になります。都合上本編では書かれることのない学校での広裕たちの様子を書いていければと思います。本編と同時に並行で進めていく予定です。本編と一緒になにぞよろしくお願ひします。

第一話 初めての、部活（2）

第一話 初めての、部活（2）

「滑河さんが、入つただとおおおおおおおおつ！？」

教室にむさ苦しい男の叫びが響き渡る。四月の朝に似つかわしくない叫びに教室中が振り向いた。冷たい視線が四方八方から突き刺さる。叫んだのは俺じゃないのに。

「おい勝彦、もう少し声を落とせよ」

教室が静まりかえる中、俺は目の前の丸刈り頭を小声でたしなめる。こいつの名前は小本勝彦。おもとかつひ頭からも判る通り立派な高校球児の一員である。創立以来の伝統を誇る新豊学園野球部には、男子部員は全員丸刈りマルガリータにしなければならないと部の規則で決まっているらしい。任意ではなく義務だ。おかげでこの学園では丸刈り＝野球部という図式が上の学年から下の学年まで浸透している。

野球部に入つていなくても丸刈りにすると野球部扱いされるのだ。噂では彼ら丸刈りマルガリータのために丸刈り専門の床屋もあるらしい。とか他に明岡市内で丸刈りをする床屋があつたらまず潰れる。質の悪い冗談のようだが、実際に潰れたらしいから笑えな　　ってそれは今問題じゃない。

問題なのは、勝彦が『模範的な』野球少年ということだ。極めて模範的な　　野球少年。やきゅううはか野球以外のことはこと」とく頭から抜けていく、それこそ模範的なまでに馬鹿なのであつた。今もこいつの頭からは周りの迷惑とか、そういうものが抜け落ちている。こんなでも勝彦とは一年の時から同じクラスだった関係もあり親しい部類に入る。一年間で学んだことは『バカも三日で慣れる』ことぐらいか。

「どうか勝彦。まずお前に一つ聞きたいんだが、

「お前なんで滑河さんのこと知ってるの？」

なんでお前が一昨日入ったばっかの転入生の情報を持つてるんだ?

ところが勝彦は至つて平然と、

「なんでもなにも、俺じゃなくてもみんな知ってるだろ」

「え? そうなの?」

俺は勝彦の隣にいる一人を見やつた。どちらかといふと小柄な童顔少年と、爽やかな面をした優男。童顔のほうが永原健児。ながはらけんじ 優男のほうは八広聰次郎。やひろそうじろう 勝彦と同じく、一年からの付き合いだ。

「もちろん知ってるよ。知らないのは那智君ぐらいじゃないかな」健児がにこやかに告げる。俺を小馬鹿にしているように聞こえなくもないが。

「隣のクラスに来た転入生だろ? もちろん知ってるさ」聰次郎の返事も似たようなものだつた。

「……もしかして、広裕。昨日まで転入生が来たこと知らなかつたでしょ」

「うつ」

健児に痛いところを突かれ、俺は一の句を継げない。そして何も言わなかつたことが決定打となつたのか、

「やつぱりそつか……広裕、そういうのには疎いもんね」

どこか達觀した様子で、健児が意味ありげに頷く。高校二年生には見えない童顔と高校二年生には見えない大人びた雰囲気。こうして微笑んでいる裏で何を考えているかもわからない。いわゆる不思議系つてやつだ。誰か、こいつの真意を探れる人はいないものか。

「余計なお世話だ」

「しちょうがねえよ、広裕は女の子に興味ないんだから」

「勝彦は黙つてろ」

少なくとも、むせ苦しい男の世界に身をおいているお前の言えたことか。

「だつてよー」

「まだ学園生活を送りたいんなら黙れ」

「……」

まつたく、馬鹿は扱いが楽で助かる。

「あんだけ可愛い幼馴染がいるのにね」

歯を見せて笑う聰次郎。端正な顔立ちだけあって女子にはもてる

タイプの男だ。あれさえ除けばイケメンの一言で説明がつくだろう。

あれの話は今は関係ないのでいずれまた。

「興味ない訳じやないんだけどな……」

空に向かつて咳いてみる。俺だつて男子高校生。興味がないと言えば嘘になる。男子なんて妄想と煩惱の固まりだ、つてばあちゃんが言つてたつけ。嘘だけど。

「俺のことほっとけよ……お、そういうやもう一つ聞きたいのが」

俺は一回言葉を切つて 勝彦を指差した。

「どうして滑河さんが鉄研部に入つたのをお前らが知つてるんだよ！」

俺が顧問の深浦先生のところに滑河さんの入部届けを出したのは昨日の放課後。こいつらに話した覚えはまつたくない。

すると健児が喜色満面の顔で、

「僕は人づてだけど……朝方に深浦先生が教職員室で他の先生達に自慢してたらしいよ」

「犯人は先生か つ！」

どうみても犯人は身内です。本当にありがとうございました。確かに滑河さんを自慢したくなるのもわかるけど。とこつか新豊学園の教職員の情報管理はどうなつてるんだ？ 朝の教職員室の情報が今教室にあること自体、本来はおかしいだろ。うちの学校のノリの良さも伝播力を少なからず手伝つてるんだろうが。

「しようがないよ。ファンクラブもあることだし」

聰次郎が頷く。ん？ ファンクラブ？

「ファンクラブって？」

「お前知らねえの！？」

勝彦が立ち上がり叫ぶ。だから俺たちが変な目で見られるからやめろつての。しかしさつきよりこちらを見る目は少ない。あ、慣

れただけか。一部の視線が、ほとんどが男子だが、俺だけに向いているのは気のせいだろう。多分。

「……本当に知らない？」

健児が首を傾げて俺を怪しむ。

「本当も何も……」

昨日滑河さんの存在を知ったばっかだつてのに、ファンクラブなんて知ってるわけがない。

「そのファンクラブってのは……具体的にどんな奴らなんだ？」

「えーっとねえ、滑河さんが来た当日に告白して玉砕した人たちの傷の舐めあ……集まりが最初みたい。今はもう百人はいるみたいだけど」

つまり百人近くが当たつて砕けたわけか。

「気をつけなよ、広裕」

急に聰次郎に肩をたたかれた。

「え、そんなに危険？」

「だってファンクラブの人つて『滑河さんとお近づきになりたいよおつ！』って人でしょ？」

健児が聰次郎の言葉の後を継ぐ。声まねの時は平常時とのギャップに吹き出しかけた。

「その滑河さんが鉄研部に入ったとなれば、みんな鉄研部に押し寄せてくるんじゃない？」

「確かに……」

可能性は否定できない。滑河さんと一緒にいられるという意味では、これ以上いい場所はないだろう。だがしかし、

「可能性はなくはないが……可能性があるだけだる」

あくまでも鉄研部は鉄道を楽しむための部活。誰でも大歓迎とはいつたが、全く興味ない奴に来られてもこちらが困る。その辺について新入生には部活紹介の時に釘を刺してあるし、在校生の連中は先代の部長のおかげで身に染みて判っているはず。去年も同じような騒ぎがあつたからな。鉄道好きの女子の割合はかなり低く、実社

会じや男女比が「十対一」にもならないといふのに、去年の鉄研部は女子が先代の部長を含めて三人。その割合は実に「対三（そして数少ない男子の一人が俺だった）。しかも三人とも美少女だったもんだから学園中が沸きに沸いていた。もつとも、知れ渡つたのが正式な入部が決まつたあとだつたから噂どまりだつたが。ここまでのりスクを乗り越えてまで鉄研部に入ろうとする奴がいるのか？ いたらむしろその熱意を買つてやりたい気分なんだが。

「はつはつは、そんな有象無象に構つてる余裕はないのさ！」

「あ……やつぱり広裕は何も分かつてないよ……」

俺の高笑いに健児が肩をすくめる。

「健児。そこ、つつこむところじゃなくね？」

「次喋つたら国外追放な」

「……………せめて市外にしてくれ」

「おーい、みんな席に着けー。S H R ^{シヨーツ}始めるぞー」

勝彦と他愛もないやり取りをしていると今回の元凶が教室に侵入してきた。鉄研部顧問にして我が一年六組の担任、深浦先生だ。『大人の女性』の身体つきとがさつな物言いが不思議なくらいマッチしている。

「……………お、そういえば那智」

と突然、深浦先生に呼び止められた。

「なんですか？」

「いや、滑河のことは教職員の間でも有名だからな……がんばれよ」
そう言って肩に手を置く先生。随分と他人事のようにおっしゃいますけど。あんた鉄研部の顧問でしょうに。

「何をどうしろってんですか……」

人の口には戸は立てられぬ。広がりつつある噂の元凶を睨みつけつつ、俺は自分の席に戻つた。

最初に違和感を覚えたのは校舎を出すぐ。部室棟の手前にできただまりを過ぎたあたりだった。

「ん？」

「……どひしたの、広裕」

「いや……」

放課後。同じクラスの結那を連れ立つて部室に向かっている途中で俺は立ち止まつた。いつもならありえない光景がそこにあつたからだ。

「……なんだあの列は」

部室棟の校舎側には一階の部室に繋がる階段がある。鉄研部に行くためにはそこを通らざるを得ないのだが、階段を塞ぐ形で人の列ができていた。少なくとも二十人はいるように見える。

「……なに、あれ」

結那の足も止まる。そつだろ？ 部室棟は行列と無縁な場所のはずなのに。部室棟に入っている部活は、部員が五人以下の弱小文化部が殆ど。というより、部室棟に部室があることが『あ、うち弱小（文化部）なんで』と自ら公言しているようなものだ。部室棟に部室のある部活の生徒は合わせても三十人ほど。鉄研部のある一階では十二、三人といったところか。ちなみにこれはまだ先輩達がいなくなる前の数字だから今はもつと少ないはず。おまけに部室棟に用がある人間といえば、部員以外なら生徒会か先生たちぐらいしかない。二十人ばかりが階段に並んでいるなんてことは、普通ではない。

不思議に思いつつも俺は止めていた足を踏み出した。この列が何であろうと、階段を上りきらないことには部室に行けない。

階段の袂に辿りつくと、さらに列の不自然さが目につく。

「どこまで続いてるんだ、これ……」

階段の一段一段を埋め尽くす人の群れ。妙に黒っぽい列だと思つたら、並んでいる生徒の殆どが男子だった。黒い列は階段を上がりきつたところで折れ曲がり、さらにその先へと続いていた。校舎側からは階段の先までは見えなかつたから、まさかここまで長いとは

「もしやお隣がやらかしたか……？」

鉄研部の隣にある工学部はかなり危険な連中だ。なんせ日々爆発音が聞こえてくるような部活だ。主に電気回路を使ったものを作っているらしいが、日常的に爆発音がする時点では普通じゃない。過去にも工学部から煙が上がつて消防が駆けつけたこともあったそうだ。その時は電気回路のショートが原因だったみたいだが、今全く同じことが起きても不思議じゃない。多分工学部がまた爆発でも起こして野次馬がたかってるんだろう。男子ばかりなのもそれで説明がつく。何が言いたいかというと、どうやらこの列に鉄研部は関係なさそうってことだ。

「ま、行くか」

黒い行列を尻目に、狭くなつた階段を登る。元々狭い階段の幅が列のせいで一人分しかない。それでも塞がれてないだけましなんだろうか。

階段を登りきつたときのことだった。

「……ん？」

肩をつつかれた感覚がしたので振り向くと、

「……へ？ な、なに？」

後ろからついてきていた結那が不思議そうに俺を見つめていた。あれ？ 肩をついて俺を呼んだんじゃないの？

「お前、俺の肩をつつかなかつたか？」

「え、そんなことしてないよ。大体……そんなところまで手が届かないし」

「え……あ

気まずそうな顔をする結那を見て、俺は気がついた。結那の頭は今、俺の腰の高さにも届いていない。元々平地で並んだとしても、結那は俺の目線ぐらいの背丈しかない。しかも、その結那は数段下にいるわけで。当たり前といえば当たり前の話だった。

しかし、結那じゃないとなると一体誰が……と思っていたその時。

「あの……」

申し訳なさそうな声に体を逆回転。九十度を過ぎたところにそいつはいた。

「失礼ですが……那智、広裕先輩ですか？」

光沢の残る学ランを羽織った少年。結那と同じくらいの背丈からして新入生かな。手にはなにやら一枚の紙が握られている。あれ？ その紙、なんだか見覚えのある気が……

「え、あ、うん、そうだけ?」

『なぜ俺の名前を知っている?』などなど、聞きたいことは無数にあつたが、否定する理由はなさそうなので認めた。 その後。

「おーい！ 那智先輩が来たぞー！」

俺の目の前でいきなり叫びだす新入生。 そして、

「本當だ！ 那智先輩だ！」

「先輩！ これ、これを！ これを受け取ってくだへぶつ！」

「押すなよ！ 押すなつて！ 押さない！ 三段活用！ つて誰だ

俺の靴を踏んでるのは! ?

「どけ！ 俺が先に渡すんだ!!」

「…………えつ…………？」

黒い波が 黒の行列が崩れた結果 俺に向かつて迫りくる。元から狭い通路が、俺に殺到する黒集団に完全に埋まる。前からも後ろからも殺到して、俺はたじろぐことすらできない。誰かの足元からは悲鳴まで聞こえる。

そして全員の手には一枚の紙切れがあつた。近くの奴も遠くの奴も高々と掲げている。まるで俺に取れともいわんばかりに。

とりあえず目の前で押しつぶされている奴から一枚かっさひ。助けはしない。

「あ……」

「どれどれ……」

…………絶句した。

『入部届』『一年』『鉄道研究部』……もうこれだけで何が書いてあるか十分に伝わるだろう。昨日滑河さんから受け取ったのと同じ

紙がそこにあつた。

『氣をつけなよ、広裕』

今朝の健児の言葉が脳裏にふと甦る。

『滑河さんが鉄研部に入つたとなれば鉄研部に押し寄せてくるんじやない?』

もしや、健児は「」のことを言つていたのか。あの時は「冗談かと思つて軽く流したが、今この状況では冗談とも言えそうにない。可能性はゼロではなかつたのだから。

「……ところで」

俺は目の前で押しつぶされていいるやつの前に片膝をついた。

「これは顧問に出すもんだが? ん?」

押しつぶされている新入生の眼前で入部届をひらひらさせると、

彼は「ひいっ」と情けない声をあげ、

「……け、今朝、深浦先生のところに行つたら、『それは部長の那智君に出して』と言われまして……」

「……」

情報漏洩の次は仕事丸投げですか。そうですか。つて、去年も同じようなことがあつたよくな。

先生への愚痴はひとまず置くとして、これで事情ははつきりした。要は滑河さん目当ての奴らがここに集つてゐるわけだな? 鉄研部に要らないどころか一番来てほしくない奴らだ。そんな邪な奴を仲間にする気は毛頭ない。もちろん、鉄道に興味があるなら考えてもいい。さすがにこれだけいれば一人か二人は純粹な入部希望者がいるだろう。

迫りよる波に押されたのか、いつのまにか俺は鉄研部の方向に追いやられていた。すぐ後ろにいたはずの結那は廊下の端に取り残されている。足元にあつた彼も誰かの下敷きになつていてるんだね。彼は犠牲になつたのだ……とはいうものの、依然として俺のところに詰めかけてきている状況は変わらないわけで。

「先輩! 受け取つてください!」

「那智先輩！ お願ひします！」

「俺を！ 是非とも俺ぼふつ！？」

さすがの俺にも我慢の限界がきた。押し寄せてくる黒い波を手で振り払う。

自分を落ちつかせるためにふう、と一息。そして、「気をつけえええええええええつー！」

あらん限りの声量で叫んだ。

ザザザツ！ と、俺にたかっていた奴らが一瞬のうちに固まつたかと思うと水が引くように後退していく。さながら海を割ったモーゼの氣分だ。

「番号ーつ！」

「へつ？」

俺の叫びに一番先頭にいた生徒が狼狽する。なぜ戸惑う。この掛け声でやることといえば一つしかないのに。仕方ない、もう一発喝を入れてやるか。

「番号 つ！」

頭をがつちり抑えた状態で唾のかかる距離から叫べば、さすがの鈍感でも気がつくだろう。

「あ、え、い、いつ、いちいつ！」

「に、にいつ！」

「さんつ！」

威勢のいい掛け声が廊下を伝つていいく。瞬く間に掛け声の発信源は壁の向こうへ、結那のいる階段のところへと移動していく。

「……三十七人か。多いな」

掛け声が消えたところで部室の鍵を開ける。ファンクラブがあることを考えれば少ない数字なのかもしれないが、これから入部審査本来なら滑河さんのように軽く談笑する程度のものなのだが、何しろ中身が中身なものでをするには十分すぎるほどに多い。部室の定員は八人。既に四人の席は埋まっているから、一回につき四人が限度だ。

「広裕……」れ、どうこうこと?」

遅れて結那が俺の元に駆け寄ってきた。ついでに結那はずっと蚊帳の外だったな。まだ事情もつかめてないようだし。

「ああ、それがな……」

「あれ? お一人さん何やつてるの?」

結那に説明しようとしたところで、上市が手を振りながら何事もないかのようにやつてきた。上市は俺たちの目の前に来るや否や、廊下を一通り眺めて、

「……やっぱ何なのこの行列は。何待ち?」

あ、こいつにも説明しないといけないのか。面倒くせー(棒読み)

「……まずは中に入るわ。それから説明するから。あ、上市。そいつらを入れないようにしてくれ

「りょーかいっ」

背後の俺を呼び止めるようとする声を無視して、俺たちは部室の中に入つていった。

鉄の扉が閉じられると、部室は異様な静けさに包まれる。いや、本当は廊下があまりに騒がしそうだけで、これが部室棟の本来の姿だ。俺を追い詰めていた黒集団の懇願の声は怨嗟えんさの声となつて、時折扉の向こうから漏れ聞こえてくる。いつもは無機質な感が拭えない鉄の扉が今日は頼もしい。

「ふーん、トッキーのファンクラブ、ねえ……」

俺が一通り話し終えると上市がうんうんと頷いた。

「つて、トッキーってなんだよ」

「えー、いいじゃん。時子なんだから」

そこでよつやく、俺はトッキーが滑河さんを指していることに気があたる。滑河さんと呼んでいるから名前をもじつていることに気がつかなかつた。時子だからトッキー。なんとも安直なネーミングである。

「そんな奴に入られても困るけどね」

結那が苦々しげに呟く。こいつは俺と並んで生糸の鉄道好きだ。鉄道に興味がない奴が入ったところで、結那が受け入れるとは到底思えない。むしろ全力で追い出そうとしかねないから困る。

「だから入部審査で片を付けるんだよ」

俺も結那と同じく、興味のない奴には来てほしくないと思つてゐる。例えるなら『樂器は演奏したくないけど吹奏樂部に入りたいです』って言つてるのと同じ。部活を活氣づけるどころか滞らせてしまふ。

だけども、それはあくまで個人的な感情。部長権限で無理やり入部を辞退させるわけにはいかない。

そこで入部審査だ。審査といつても、昨日の滑河さんの時のように、鉄道好きかどうかを確認する程度の雑談だ。俺たちにとつては他愛のない会話に過ぎない。が、それはあくまでも鉄道好きでの話。鉄道好きじゃない奴にこの手の会話を振つても会話が進まないことは、過去の経験からして明らかだ。^{じい}新豊学園に来てからは、鉄研部ではつちやける代わりに教室では鉄道ネタを極力振らないようにしているが。鉄道に興味があるかないかで振り分けるには最も効率のいい方法だ。

それでも結那は不満そうな顔をしていた。

「……で、その入部審査とやらはどこでやるの？ まさかここ？」「ここ以外のどこでやるんだよ」

弱小文化部の鉄研部が、これだけの人数が入るところを借り切つてできると思つてんのか？

「大体、最終的に見るのは俺なんだから、一回で全員見きれるわけがないだろうが」

入部審査は、新年度の部活を前にしての大事な仕事だ。どのみち最後は俺に判断が委ねられるわけだが、四十人近い集団を一度に見きれるわけがない。聖徳太子じやないんだからね。一回でも数人が限度だ。

「あ、そっか」

「んじゃ、これを持つてつてくれ」

結那が納得したところで、俺は部室備え付けのプリンターから吐き出された紙を手渡した。印刷したといつても、単に枠が連なつてるだけの簡素な代物だ。

「…………？」

視線を俺と紙との間で往復させる結那。

「広裕……何、この紙」

「そいつに名前とクラスを書いてもらひって、今日のところは帰つてもううように言つてくれ」

「別にいいけど……何に使うの？」

「今の時点の人員把握をしどきたいからな」

今はまだ仮入部期間の最中。その一回でこの有様だ。これから同じような輩がどんどん増えてもおかしくはない。せめて今いる奴らだけでも把握しておきたい。何もせずに帰したら明日もまた同じ事態になりかねん。

「それに……」

「…………それに？」

「あいつら邪魔だし」

いつまでも部室棟の廊下を占拠しやがつて。なにより騒がしいのが一番困る。

「じゃあ、それもついでに伝えてくる」

そう言って結那が立ち上がった時だった。

バタン、と開くはずのない扉が開かれる。せき止められていた外の騒ぎが、否応無しに聴覚を刺激する。

だが、一番大きな変化はそこではない。

開かれた扉の前に立つ人影が一つ。廊下の混沌とした空氣にも、部室棟のしんみりとした空氣のどちらとも混じることなく、堂々と部室へと入ってくる。

鉄研部の期待の星であり、彼らの羨望せんぱう的であり、今回の騒ぎの

中心 滑河さんだ。

滑河さんの背後では隙あらば、とばかりに黒い波が部室へ殺到しようとしていた。だが滑河さんが後ろを振り向いただけで動きはぴたりと止む。微笑んだのか、それともきつく睨みつけたのか。後ろ姿しか見えなかつた俺にはどっちだったのかは分からぬ。少なくとも彼らがすくみ上がるような顔をしたことだけは確かのようだ。

滑河さんが厚い扉を閉めると、再び部室に静寂が戻る。直後に波に乗り遅れた彼らの拳の音が反響しだすが、そこは鉄の扉。叩かれた程度ではびくともしない。先に彼らの拳が擦り切れそうだ。

とか思つてゐる間に拳の音はどんどん小さくなつていき、今度こそ本当に、部室に静寂が戻つてきた。

「ふう……まつたく、何だつたのかしら、あれ」

滑河さんは深く息をつきながら、長い髪を右手で振り払う。

「那智君は何か知つてゐる？」

鋭利な双眸が俺を見据える。穏やかな口調ではあるものの、『何か知つてゐるよね?』という追及であるのは火を見るより明らかだつた。

「えーっと……」

抗う気力が俺にあるわけがなく、全てを話す運びとなつた。

少年説明中

「……なるほどね」

俺の話を聞き終えた滑河さんが開口一番に言つた。

「まったく、ファンクラブなんて誰が作つたのよ」

呆れ顔を浮かべる滑河さん。転校早々にして自分のファンクラブが出来るのはいい氣がしないのだらう。呆れ顔の中にもぞこか陰鬱な色が見える。

「那智君がファンクラブをつぶせば万事解決じやない?」

「それができたらいいんだけどね……」

滑河さんの冷徹な物言いに俺は苦笑いで答えた。新入生に対してあまりに冷酷な言い方のように思える。滑河さんって実は直球ストレートなタイプなんだろうか。

問題はどんだけ彼らが不純な動機をもつてたとしても、俺にはそれを無碍にすることはできないところだ。部長の俺には入部希望者をわざわざ跳ね除ける理由がないし、眞の意味での入部希望者がいないとは限らない。つまり、

「入部審査に全てがかかっているわけか……」

先にも後にも篩にかける機会ふるい チャンスがあるのは入部審査限り。最終的に俺が決めざるを得ないだろう。新豊学園鉄研部部長としても、そして一人の鉄道好きとしても。まさかこんな早くから胃の痛くなる仕事があるとは思つてもいなかつたが……

「広裕一、書かせてきたよー」

とその時。外に出ていた結那が部室に戻ってきた。

「おお、サンクス」

結那から例の紙を受け取る。白紙同然だった紙が、八割方文字で埋められていた。

「よし」

俺は改まつてテーブルに就く残りの三人に目を向けた。昨日のお茶らけたノリではない。緊張した面持ちで左右に見渡すと、三人とも真剣な眼差しで俺の方を向いていた。

「今、俺たちは苦難の道に立たされた。鉄道好きでない奴で部員数を上げるか、鉄道好きを入れて少人数でやっていくか……俺は、後者でやつていきたいと思う」

三人が力強く頷いた。

「だからこそ新入生はしっかりと絞つていきたい。そのためにはみんなの協力が必要だ。いいな?」

再びの首肯。

「それじゃあ、鉄研部の安泰のために!」

『おー!』

各部活が新入生をぶん取りあう仮入部期間。その中で新入生を落とすという、新豊学園始まって以来初めてのプロジェクトは、こうして幕を開けたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6530u/>

みんな学ぶ気です？

2011年8月8日03時21分発行